

農業生産技術と国際協力__レポート 1

<本文>

新技術が導入されるとき、生産力の向上やリスクや負担の軽減等、良かれと思って社会へ紹介される。そのうえ、誰も使ったことがない技術なので、建設的な批判をすることも難しく、新技術の導入というだけで魅力的に感じてしまう人が多い。そしてこの風潮は、農業技術においてもいえることができる。しかしこれに待ったをかけるのが、ARDEC60号に掲載された記事「農業農村開発技術を考える」だ。

そもそも技術は、工学や化学、生物学といった学問が実世界に応用されることによって開発される。ここで重要なのは、学問はあくまでその分野の知識を深めることが目的なので、その後どのように現場に適用されるかまでは基本的には想定されていない。従ってその学問から派生した技術を社会に導入しようとしたとき、「本当に役立つのか？」ということを熟慮しなければいけない。農業技術で例えとすると、村Aで大型機械を導入することを考えたでしょう。この大型機械は作物の収穫を全て自動で行ってくれ、労力のコストを大幅に削減することができる。しかし、もし村Aの畑が直線的な（四角形や長方形ではないような）畑でないとしたら？もし、畑が段々になっているとしたら？この大型機械を導入することによって、新たな土地の整備や換地を行う必要性が出てくるかもしれない。また、村Aが代々受け継いできた伝統的な農業技術はどうなるのだろうか。それにこの収穫作業を行うに当たってのしきたりや人材も必要なくなってしまうのではないか。このようなことを全て考慮すると、この大型機械を導入すべきかどうかはそう単純な話ではなくなることが分かる。

本記事で書かれている著者の幼少期の体験は、この技術導入の複雑性を物語っている。農家の家に生まれた著者は、田植えの時期が来るのが楽しみだったという。「苗束を一行に並んだ女手の少し手前に投げ入れる『苗ぶち』が大好き」で、何よりも「母が田植えの日に早起きして、田植隊をもてなすために作る御馳走」が好きだった。このしきたりは、「結」という共同労働形態があったからこそのもので、後に農業機械が導入されてからはこのような催し物は一切なくなってしまった。農業における技術革新は、日本の農業の生産力こそ強めたが、後継者や耕作放棄地の問題といったように、以前は誇りある農業の仕事が気づけば、不人気な職種にさせてしまった。

現在、日本をはじめ多くの先進国が途上国の農業生産力を高めようと援助の手を差し伸べている。大半は技術や制度を導入するもので、先進国のような大規模で効率化された農業の実現を目指している。しかし、これらの援助は本当に農民の役に立つのだろうか。彼らにも既存の技術があることを忘れてはいないだろうか。本記事では、(1)現状を正しく分析すること、(2)どの技術をどの順番で普及させるのか、まずこの二点を明確化する必要があると論じている。技術が農民の役に立つのかどうかは極めて抽象的で主観的になりやすい問題だ。改めて対象国とそこに住む人々への理解、そして対話が必要なのだと本記事から感じた。